

青春スクロール

母校群像記



はくよう
県立柏陽高校 10

理数科の授業「未知」への扉

柏陽高は、文部科学省のスーパーサイエンスハイスクールに指定されるなど理数科教育にも力を入れている。

人工知能を持つ実験ロボットを導入に取り組む東大大学院教授Ⅱ元東工大教授Ⅱの一杉太郎(50、1990年卒)は7月上旬、母校であった出前講座「東工大イン柏陽高」で講師役を務めた。「もともとが面白い。他の人と違った考えこそ大切で」と在校生に呼び掛けた。

中3から高1になった86、87年の間に、「高温超電導」が世界的ブームになった。電気が抵抗を受けずに流れ続ける超電導を応用すれば世の中が劇的に変わる。次々と伝わるニューズに心を躍らせた。「世の中がどかんと変わる。そんな科学の力に衝撃を受け、憧れました」

学校帰りに足しげく図書館に通い、科学の本をむさぼり読んでいた。科学の本をむさぼり読んでいた。



「記憶力やテクニックに頼った勉強法では発想力は培われない」と話す一杉



「人生の岐路には『恩師』がいる。自ら選べ、教えを請うのが肝心です」と話す越川



好きな数学は先取り学習で進めていた斎藤

だ。「宇宙からの帰還」(立花隆著)は最も好奇心をかき立てた1冊。「宇宙から自然のままの地球を見ていると、国境というものがいかに不自然で人為的なものであるかがよくわかる」といったくだりに「世の中を見る目が一変した」。科学技術の未来への可能性を改めて感じた一杉は、標準を理系に合わせ、東大理科一類に進学した。

肝がんな新たな腫瘍マーカーを発見した東工大教授の越川直彦(57、84年卒)は、昨年の出前講座で講演した。専門のがん早期発見の最先端医学を紹介し、後輩たちに「やりたいことをとことん突き詰めて」とエールを送った。

科学を身近な存在に感じたのは高1で受けた「教科書の奥にある未知の世界を考えさせる」生物学の授業だった。「メンデルの遺伝の法則」の詳説に生命の神秘を感じた。「研究者になるうちは思わなかったが、科学への興味は人一倍強かった」。

ワンダーフォーゲル部顧問だった高3の担任には「トライすること。それでだめならいいじゃないか」と繰り返し諭され、そのプラス思考は研究者となつてからも精神的な支えになった。

電波望遠鏡で天の川銀河に、生命の起源となるアミノ酸の材料となる分子をとらえた国立天文台副台長の斎藤正雄(52、88年卒)。2015年に母校に招かれた講演で、電波望遠鏡の魅力を伝えた。

高校では野球部に所属。最後の夏の大会直前に、体育の授業で左ひじを剝離骨折し、絶望の淵に。だが「絶対に間に合う」と信じ、片手で素振りを続け、本番で適時三塁打を放った。一方で、自意識が強い性格から人に合わせるのを嫌い、集合写真にもあえて写らないよううつつ屈した一面もあった。

そんな気持ちを解放してくれた一冊の本があった。ノーベル物理学賞の湯川秀樹が書いた「旅人」。未知の世界を探求する人々は、地図を持たない旅行者である。など言葉の数々が乾いた心を潤した。「物理の世界の入り口にもなったバイブルです」

敬称略